

畑のへり

宮沢賢治

青空文庫

麻が刈られましたので、畑のへりに一列に植ゑられてゐたたうもろこしは、大へん立派に目立つてきました。

小さな虻あぶだのべつ甲いろのすきとほった羽虫だのみんなかはるがはる来て挨拶あいさつして行くのでした。

たうもろこしには、もう頂上にひらひらした穂が立ち、大きな縮れた葉のつけねには尖とがつた青いさやができてゐました。

そして風にざわざわ鳴りました。

一疋びきかへるの蛙が刈つた畑の向ふまで跳んで来て、いきなり、このたうもろこしの列を見て、びつくりして云いひました。

「おや、へんな動物が立つてゐるぞ。からだは瘠やせてひよろひよるだが、ちゃんと列を組んでゐる。ことによるとこれはカマジン国の兵隊だぞ。どれ、よく見てやらう。」

そこで蛙は上等の遠めがねを出して眼めにあてました。そして大きくなつたたうもろこしのかたちをちらつと見るや蛙はぎやあと叫んで遠めがねも何もはふり出して一目散にに逃げだしました。

蛙がちやうど五百ばかりはねたときもう一ぴきの蛙がびっくりしてこつちを見てゐるのに会ひました。

「おゝい、どうしたい。いったい誰たれににらまれたんだ。」

「どうしてどうして、全くもう大変だ。カマジン国の兵隊がたうとうやって来た。みんな二ひきか三ひきぐらゐる幽霊をわきにかかへてる。その幽霊は歯が七十枚あるぞ。あの幽霊にかじられたら、もうとてもたまらんぜ。かあいさうに、麻はもうみんな食はれてしまつた。みんなまつすくな、いい若い者だつたのになあ。ばりばり骨まで齧かじられたとは本当に人ごとと思はれんなあ。」

「何かい、兵隊が幽霊をつれて来たのかい、そんなにこはい幽霊かい。」

「どうしてどうしてまあ見るがいゝ。どの幽霊も青白い髪の毛がばしやばしやで歯が七十枚おまけに足から頭の方へ青いマントを六枚も着てゐる」

「いまどこにゐるんだ。」

「おまへのめがねで見るがいゝあすこだよ。麻ばたけの向ふ側さ。おれは眼鏡めがねも何もすて来たよ。」

あたらしい蛙は遠めがねを出して見ました。

「何だあれは幽霊でも何でもないぜ。あれはたうもろこしといふやつだ。おれは去年から知ってるよ。そんなに人が悪くない。わきに居るのは幽霊でない。みんな立派な娘さんだよ。娘さんたちはみんな緑色のマントを着てるよ。」

「緑色のマントは着てるさ。しかしあんなマントの着様が一体あるもんかな。足から頭の方へ逆さかさまに着てるんだ。それにマントを六枚も重ねて着るなんて、聞いた事も見た事もない贅ぜいたく沢だ。おごりの頂上だ。」

「ははあ、しかし世の中はさまざまだぜ。たとへば兎うさぎなんと云ふものは耳が天までとゞいてゐる。そのさきは細くなつて見えないくらゐだ。豚なんといふものは鼻がらつぽになつてゐる。口の中にはとんぼのやうなすきとほつた羽が十枚あるよ。また人といふものを知つてゐるかね。人といふものは頭の上の方に十六本の手がついてゐる。そんなこともあるんだ。それにたうもろこしの娘さんたちの長いつやつやした髪の毛は評判なもんだ。」

「よして呉くれよ。七十枚の白い歯からつやつやした長い髪の毛がすぐ生えてゐるなんて考へても胸が悪くなる。」

「そんなことはない。まあもつとそばまで行つて見よう。おや。誰たれが行つたぞ。おいおい。あれがたつたいま云つたひとだ。ひとだ。あいつはほんたうにこはいもんだ。何をするか

こゝへかくれて見てゐよう。そら、ちよつと遠めがねを貸すから。」

「あゝ、よく見える。何だ手が十六本あるつて。おれには五本ばかりしか見えないよ。あつ。あの幽霊をつかまへてるよ。」

「どれ貸してごらん、ああ、とつてるとつて。みんながりがりとしてゐるねえ。たうもろこしは恐こはがつてみんな葉をざあざあうごかしてゐるよ。娘さんたちは髪の毛をふつて泣いてゐる。ぼくならちやんと十六本の手が見えるねえ。」

「どら、貸した。なるほど十六本かねえ、四本は大へん小さいなあ。あゝあとからまた一人来た。あれは女の子だらうねえ。」

「どう、ちよつと、さうだよ。あれは女の子だよ。ほういまねえあの女の子がたうもろこの娘さんの髪の毛をむしつてねえ、口へ入れてそらへ吹いたよ。するとそれがぱつと青白い火になつて燃えあがつたよ。」

「こつちへ来るとこはいなあ、」

「来ないよ。あゝ、もう行つてしまつたよ。何か叫んでゐるやうだねえ。」

「歌つてるんだ。けれどもぼくたちよりはへただねえ。」

「へただ、ぼく少しうたつてきかしてやらうかな。ぼくうたつたらきつとびっくりしてこ

つちを向くねえ。」

「うたつてごらん。こつちへ来たたらその葉のかげにかくれよう。」

「いゝかい、うたふよ。ぎゅつくぎゅつく。」

「向かないよ。もう少し高くうたつてごらん。」

「どうもつかれて声が出ないよ。ぎゅつく。もうよさう。」

「よすかねえ。行つてしまつた残念だなあ。」

「ぼくは遠めがねをとつてくる。ぢやさよなら。」

「さよなら。」

二ひきの蛙かへるは別れました。

たうもろこしはさやをなくして大変さびしくなりましたがやっぱり穂をひらひら空にうごかしてゐました。

青空文庫情報

底本：「新修宮沢賢治全集 第十一巻」筑摩書房

1979（昭和54）年11月15日初版第1刷発行

1983（昭和58）年12月20日初版第5刷発行

入力：林 幸雄

校正：土屋隆

2008年2月27日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたってのは、ボランティアの皆さんです。

畑のへり

宮沢賢治

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>